

もの言う牧師のエッセー 第51話 「ウォール街異常なし」

「ウォール街を占拠せよ」をスローガンに始まった反格差社会デモが開始から1周年を迎えた9月17日、約1000人の活動家がデモ活動を行い、正午までに100人以上が逮捕された。今も色々やってるのだろうが、主だった活動は寒い冬を前に、昨年の開始から約2ヶ月で大量のごみだけ残し雲散霧消してしまったことは周知の通りである。結果的に言えばデモは何ももたらさず、ウォール街と世界経済は今日も機能している。

そもそもこのデモは、カナダの作家が昨年のチュニジアで始まり中東に広まった“アラブの春”に影響され、SNSを通して参加を呼びかけたものだったが、集まった人々はリベラル、無党派層、アナーキスト、社会主義者、保守派、宗教団体や環境保護活動家など雑多で、本来政府の金融政策や富裕層への抗議で始まったはずの活動が、主義主張に一貫性のない“烏合の衆”となってしまった。

また一方で、活動自体はゼネラル・アセンブリーを通じて合議制による話し合いで決められ、ファシリテーター班、医療班、食料班、メディア班、さらには床屋サービスといった組織的役割分担を行い、世間を驚かせた。これは1999年のシアトルでのWTO閣僚会議における新ラウンド合意を、救急医療班や逮捕者のための弁護士グループまで待機させるなど、高度に組織された“反グローバリズム”を掲げる5万人のデモ参加者が阻止してしまったことと酷似している。が、やはりあの後も社会は改善されることはなく、返って2000年代のバブルに人々は踊り狂った拳句、今日の経済の停滞と“デモ”があるのは誠に皮肉だ。

聖書の使徒の働き 19章には、イエスの弟子パウロが、世界7代不思議で有名な巨大都市エペソでやはり経済をめぐる騒乱状態に巻き込まれたことが詳述されている。

「集会は混乱状態に陥り、大多数の者は、なぜ集まったのかさえ知らなかったのも、ある者はこのことを叫び、ほかの者は別のことを叫んでいた。」

と、昔も今も人々は“米騒動”の如く利益をめぐる叫ぶ。しかしパウロが

「神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、
強く勧めてきたのである。」同 20 章 21 節:口語訳

と主張したように、単なる不和雷同ではなく、今こそ“救い主”であるキリストに叫んでみて
はいかがだろうか。そこには利益を左右する真の変革があるから。

2012-10-14



